

トロント大学留学裏話

～ 神戸三田キャンパスに生きるカナダ人宣教師の英語教育 ～

武 田 建

◆ 恩師から「大学院へ行け」と言われて

1954年3月、私は文学部の社会事業学科を卒業した。学科長的存在の竹内愛二先生【写真右】のゼミナールに属していた。同級生で、後に上智大学の社会福祉学科教授になった松本栄二君と私に、竹内先生から「来年、社会事業学科の大学院ができるから、そこに来ないか」と、「お誘い」という「命令」が下された。ケースワークを専門とする先生は、講義では「支援を求めてきた人の自己決定を尊重しなさい」と説かれたが、先生ご自身は他者の自己決定をなかなか尊重なさらないという評判だった。しかし、松本君も私も、「学科長の先生が来いと言われるのだから」と、大学院への進学を早々に決めてしまった。院の入学試験に落第するなんていうことは考えもしなかった。



◆ 大学院の認可が下りない

ところが、大学院の入学試験が近づいた頃の話である。竹内先生が我々二人を呼んで、「文部省が社会事業の大学院修士課程を認可しなかった」と言われた。私たち学生二人は、先生と大学に全幅の信頼を置いていたから、文部省の認可が下りないなんていうことは考えもしていなかった。竹内先生は、「文部省はけしからん」と憤慨しておられたが、後に自分が様々な形で文部科学省の設置審(大学設置・学校法人審議会)にかかわってみたら、学部や学科を新設するときには、教授何名、准教授何名、専任講師何名といった教員の定数が決められていることがわかった。その最低限の教員をそろえていなかったら、審査の第一ラウンドで落とされてしまう。そんな初歩的なミスを当時の関西学院大学は犯していたようだ。

◆ 福祉の院はできない、他の研究科にゆけ

仕方がないので、私は教育学専攻の前期課程に入れて戴いた。大学院生としては教育学専攻だが、無給の嘱託助手補という身分は社会事業学科所属であった。したがって、私は教育と社会事業と言う二人の主に仕えていたような院生生活を送った。竹内先生は、松本君と私が社会学や教育学の大学院へ行ったからといって、将来社会福祉学の大学教員に育てることを諦められたわけではなかった。

◆ アメリカに留学しろ

竹内先生は私に、「君は社会福祉の大学院に行かなかったから、米国の留学したまえ」と言われた。そして、なんと前期課程1年目の私に、「日本基督教団の内外協力会がおこなっている留学奨学金の試験を受けろ」と、「お勧め」という「命令」を下された。この奨学金に応募するのは、牧師さんか、キリスト教関係の学校の教職員、もしくは大学院生に限定されていたと思う。もともと専任の教員を対象とした試験だろうから、私は自分が関西学院の学内選考で落とされるだろうと思っていた。多分、竹内先生が強引に学院の上層部に働きかけて下さったのだろう、教団の本部で面接するから来てという通知を戴いた。おそろおそろ面接にゆくと、日本基督教団創立総会議長を務められた阿部義宗先生が正面に座っていらして、開口一番、「武田君、君はまだ大学院の1年生だから、また受けにきなさい」と言われ、私が何も言わないうちに面接は終わってしまった。

◆ 二度目の正直

竹内先生は、こんなこともあろうとある程度予想しておられたのかもしれない。一種の実績を私に積ませて、翌年の面接試験の時に、少しでも有利に扱ってもらえるようにとお考えになっておられたのだろう。翌年、修士課程2年目のときの面接では、「君は何処の大学院でどんな勉強をしたいか、そして、日本へ帰ってきたらどうするか」といった将来計画について沢山ご質問を戴いた。竹内先生から、「帰ってきたら関学に勤めるように」というお声を学科の先生たちから戴いている」と答えるのだぞ、と念を押されていたのが功を奏したのかもしれない。今度は首尾よく内外協力会の留学奨学金を戴くことが出来た。

私は、子どもの頃から神戸YMCAの少年部や全国高校YMCA(ハイY)キャンプに参加していて、子どものキャンプといったグループ指導に関心を持っていた。それで竹内先生は学科の将来を見据えて、出来ること

ならばグループワーク、つまり小集団活動の指導を担当する教員に私を育てたいというお気持ちだったと思う。当時、米国の社会福祉大学院のなかで、この領域は竹内先生が学ばれたクリーブランド市のウェスタンリザーブ大学の福祉大学院が全米でトップと言われていた。それに、関学の社会事業学科の専任講師に昇任されたばかりの丹治義郎先生もそこに留学中であった。

◆「カナダに行け」とアウターブリッジ院長

「アメリカに行くのだ」と思っている私に、ある日突然、学院本部から院長のアウターブリッジ先生(カナダ人宣教師)【写真下】の処へ至急くるようにというお達しがきた。「なんだろう?」。とにかく、おそろおそろ院長室に駆け足でいった。

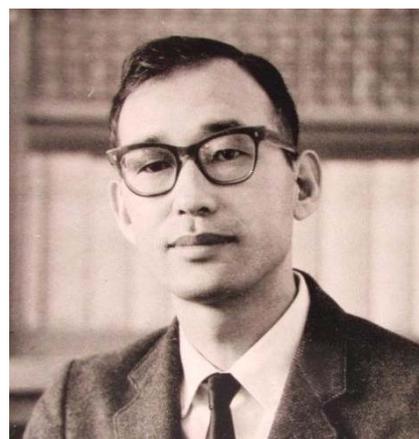
私が院長室に入るなり、笑顔のアウターブリッジ先生は、「タケダさん、留学はカナダのトロント大学へ行きましょう。いい社会福祉の大学院があります。私たちの息子もトロントのソーシャルワークを卒業しました」とおっしゃった。それだけではない。先生は、「トロント大学の社会福祉大学院の入学願書もここにきています」と、願書を机の上に広げて、その中の一枚をご自分のタイプライターの上に置かれた。そして、「タケダさん、名前は? 住所は? 何故社会福祉を専攻したいのですか?」と、次々に私に関する情報を願書に記入して下さい。そして、「ここに貴方のサインをして下さい」と言われる通り私がサインをすると、「じゃあ大急ぎでトロント大学へ送っておきます」とおっしゃって、握手をして下さった。私は、興奮というよりも、夢を見ているような気持ちだった。

次の呼び出しは、トロント大学から合格通知が来た時だった。それを戴きに院長室へゆくと、「タケダさん、読んだり書いたりする英語は大切ですが、トロントへ行ったら、英語で話したり聞いたりしないといけません。これから毎週、うちの家内の処で英語を話す練習をしましょう」とおっしゃる。なんと恐れ多い、ミセス・アウターブリッジによる無料英会話教室開講である。私は関学の中学部と高等部出身であるから、公立の中学や高校に比べると、出席した英語の授業のコマ数は多かったと思う。旧制中学部では英語の山川学三郎先生に可愛がって戴いたし、決して英語の成績は悪い方ではなかった。むしろ、よく出来る方だった。しかし、カナダの大学院にはいってすぐ講義を理解し、社会福祉の施設に実習に行き、カナダの人と話をすることなんかはとても無理な相談だった。短い間であったが、ミセス・アウターブリッジのレッスンは楽しかった。レッスンよりも、奥様となんとか英語で会話をする、いや、とにかく何でもいいから、英語を聞き、自分でも話そうとしている間に時間が経ってしまった。

◆今度は ICU だ

せっかく中学部と高等部では良い英語の授業をして戴いたのに、大学 4 年間はアメリカンフットボール部と神戸 YMCA の余島キャンプのリーダーとして忙しく、英語の勉強は大してしていなかった。そこで、アウターブリッジ先生は私のために英語の勉強第 3 弾を用意なさった。大学院の修了式が近づいてきたある日、アウターブリッジ先生は、「タケダさん、東京に国際基督教大学(ICU)があります。いい英語の授業をしています。カナダへ出発するまで、そこで勉強しましょう」とおっしゃった。嫌も応もない、これは業務命令のようなものだ。関学にいらした A. P. マッケンジー先生(カナダ人宣教師)【写真次頁】が英語教育の開発をしておられたから、話は簡単だったのだろう。それに、私も自分の英語が心配になってきていた頃だった。三鷹の ICU からそう遠くないところに、母の妹の一家が住んでいる。ライスボウルの後、よく泊めて貰ったところである。下宿をするには持ってこいだ。

当時の ICU の 1 年生は、最初の 1 年間、毎週 2 回体育実技の授業があるだけで、後は全てオーラル・イングリッシュのようなものである。教室に行くと二世のような女の先生と助手が待っていて、私たちが読んだり、暗記したり、英作文をしてきたものをどンドンテープレコーダーに吹き込む作業から始まる。そして、みんなでそれを聞きながら、発音の悪いところを指摘され、直されたりする。与えられた教材の英語のストーリーに沿っ



社会学部助教授時代の筆者、1968 年頃



て多角的に英語を取り上げていく。これまで私が習ってきた英語の授業とは全く違う英語の教え方であり、習い方だ。残念ながら、私はトロント大学へ行く前に、一夏ピッツバーグの YMCA のキャンプでリーダーをして、トロント大学での実習の前座的経験を積む計画を立てていたため、1か月半ぐらいしか ICU にはいられなかったが、ICU が行っている英語の勉強方法のインパクトは大きかった。こうした英語教育を関西学院大学在学中に受けたかったと、しみじみ感じたのだった。

◆マッケンジー先生の英語教育

ICU でこの英語教育のやり方を作り上げたのが、関西学院から ICU に移ったマッケンジー先生である。そんな立派な英語教育の専門家が 14 年(1932-41, 1947-52)も関西学院にいらしたのだったら、ICU に行かれる前に、上ヶ原で原田の森時代のように「英語の関学」をもう一度築いておいて下さっていたら、私はなにも留学前に大学院を修了してからわざわざ ICU まで行って、大学一年生と一緒に英語を勉強する必要はなかったろうにと、まことにもって無念の思いだった。しかし、大学の中で、いったん出来上がったシステムを壊して、新規まき直しで新しいやり方に作り直すのは至難なことであるのはよく分かっている。特に、ICU のようにオーラル・イングリッシュを重視しようとするならば、余計に難しくなるに違いない。しかし、これから関学の卒業生の多くは世界を相手に活躍してゆかろう。そのための一つのツールとして、読んで、書いて、聞いて、話せる英語を授けることが出来たらいいのに、という思いは常に私の頭の隅にあった。それと同時に、その昔、マッケンジー先生が ICU にお移りになる前に、関西学院で ICU のような英語革命をおこなって下さっていたら、という思いがあることも否定できない。しかし、「大学の自治＝学部自治」とも言われる状況のなかでは、マッケンジー先生もなかなか腕を振るうことは困難だったのであろうとお察し申し上げたい。こうした私の思いを、後に私が関西学院の理事長となった時、総合政策学部を新設し、理学部を理工学部へ改組転換する際、実現させた。英語を母国語にしない人に英語を教えることを大学院で専攻した教員をカナダやアメリカから来て教えてもらいたいという長年の私の希望を 2 つの学部で実現できたことは、大きな喜びであった。

【関西学院大学名誉教授、元理事長、元学長】



内緒話！

総合政策学部開設時、理事長を務めていた私は、同学部の英語の授業を M. D. ソーヤーと S. J. ロス先生のもとで、語学教育専攻の外国人教員のみで行うようにして戴きました。

また、理学部の学科増設時には、山田武雄先生を助け、英語教育の改革を進めておられたマイケル・リン先生のもとに、日本人教員ではなく、英語教育の専門課程を修了した外国人教員を 4 人採用するよう、当時の学部長にお願いしました。このことが、理系における卓越した英語教育として、のちに文部科学省から表彰されることにつながったのだと思います。

武田建先生は、1956 年 9 月から 58 年 8 月まで、トロント大学大学院（社会福祉専攻）に留学されました。その後、ミシガン州立大学大学院カウンセリング心理学博士課程で学ばれ、Ph. D を取得されました。

1962 年 10 月、関西学院大学社会学部専任講師に就任され、1972 年 4 月より教授。1985 年 11 月から 89 年 3 月まで学長、1992 年 4 月から 2002 年 3 月まで学校法人関西学院理事長を務められました。

今回、ご寄稿いただいた以降の話も、別の機会にご紹介したいと考えています。

（学院史編纂室）

